大学生における故郷観に関する質的研究

天　野　真　悟

［**キーワード**：①ノスタルジア　②喪失　③青年期］

Ⅰ．問題と目的

児童養護施設や社会的養護の中での育ちの体験について、調査を行う中で「故郷」という概念が浮かび上がってきた。そこで本研究ではその比較対象として社会的養護とは関わらない育ちの大学生における故郷観はどのようなものであるかを調べることとした。

その上で、まずは「故郷」を取り巻くキーワードとして、「ノスタルジア・喪失・青年期」を挙げ、「故郷」とは今を生きる大学生たちにとって果たしてどのようなものかを考えていきたい。

「故郷」について

故郷と聞いて、思い浮かべることはどのようなことだろうか。広辞苑で「故郷」と調べてみると、

① 古くなって荒れ果てた土地。昔、都などがあった土地。古跡。旧都。

② 自分が生まれた土地。郷里。こきょう。

③ かつて住んだことがある土地。また、なじみ深い土地。

と定義されている。現在を生きる私たちにとっては②と③の使い方がなじみ深いであろう。松尾（2006）によれば、古典語における「故郷」は漢語と和語では意味が異なると述べている。また和語の「ふるさと」の意味記述でも生まれ育った土地や、昔馴染みの場所などの意味を示しており、現代語の故郷に近い意味を「ふるさと」は持ち合わせている。古典語における第一義は広辞苑での①となるが、これは現代では忘れられているとしている。そして「異境」という意味も持ち合わせているとしている。「異境」という意味を含めると『万葉集』にまで遡ることができ、710 年の藤原京から平城京への遷都についての歌がある。遷都に伴って「故郷」（万葉集での漢字表記の場合は「古郷」）について歌ったものは確認されており、遷都がなされなくなってもその使用が確認されている。また時代を経て鎌倉時代では『新古今和歌集』で確認され、歌題として登場している。また江戸時代にも 1860 年に刊行された『大江戸倭歌集』でも確認され、これらの作品で登場する意味を見ていくと平安時代から中世、そして江戸時代と通じることがわかる。モリソン（2015）によれば、近代国家の成立とともに日本人の「ふるさとの意識」も変容していき、個性を失った田園風景、日本国土のシンボルへの形骸化、そして国民的アイデンティティーを支える「真」の伝統文化を継承する場としてみなすようになったとしている。また『故郷』という歌も有名である。高野辰之作詞、岡野貞一作曲によって 1914 年に文部省唱歌として誕生したとされている。モリソンの指摘する近代国家の成立から少し経った頃に該当すると思われる。1 番の歌詞は「兎追ひし彼の山　小鮒釣りし彼の川　夢は今も巡りて　忘れ難き故郷」であり、山や川が出てくることは、今を生きる私たちの一般的な感覚と近いものがあるのではないだろうか。この歌詞や第一次世界大戦が勃発した

時代背景を考えれば、この故郷の意味するところは広辞苑でいうところの②になるだろう。いずれにしても、日本において「故郷」という言葉は時代に伴う意味の変遷はあるが、その本質は失われずに生き残ってきた言葉ということができるであろう。そして、「故郷」という言葉は心の中で思われて使われてきたことも、変わらないであろう。

「ノスタルジア」について

ノスタルジア（nostalgia）は、オーレックス英和辞典によると、「郷愁」と訳されている。楠見（2014）によると日本語のなつかしさは「喜怒哀楽のような表情との対応ある基礎感情とは異なり、複合的な感情」と位置付けている。Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C.（2008）はノスタルジアを “a sentimental longing for one’s past”（個人の過去に対する感情的な思慕）と定義しており、感情として扱われるとしている。もともと、ノスタルジアという用語は複合的な感情を表すものではなく、17 世紀にスイスの精神科医である Hofer, J; Hofer.（1688, 1934）が nostos（return）と alogos（pain）を組み合わせて、作った造語が始まりである。そしてホームシック（homesickness）と同義として使われるようになった。その後、不安や悲嘆、不眠などの心理的症状について、精神疾患を表すものとなった。20 世紀後半に Freud, S. による精神分析的な捉え方が一般的になると、ノスタルジアは退行と考えられるようになり、強迫神経症やうつ病の症状の 1 種と捉えられるようになった。しかし近年では、症状・病理としてだけの認識でないことが Davis, F.（1979）によって示されている。そこでは「ノスタルジア」という言葉からの連想として「暖かさ、古風、子ども時代、切望」が挙げられている。再び、楠見（2014）によると、西洋文化による「ノスタルジア」と日本文化における「なつかしさ」は必ずしもまったく同じ意味を持つわけではなく、日本では他者との相互作用の

意味合いが強い可能性について述べている。

Wildschut, T.（2006）は、ノスタルジアが持つ性質について 7 つの研究を通して調べ、雑誌への投稿内容の分析やノスタルジックな経験の記述を求め調査を実施している。その中の研究の 1 つにおいて、社会的絆（ECR—R: Revised Experiences in Close Relationship Scale）の測定を質問紙で実施し、ノスタルジアを感じている参加者は、愛着不安傾向や愛着回避傾向が低く、社会的なつながりを求めていることを明らかにしている。

また川口（2011）は、ノスタルジアに関する心理学研究を見ていく中で、ノスタルジアは単に過去への惜別の念ではなく、現在の逆境を乗り越え、将来の健康な心理状態を保つという機能を持つ感情であると述べている。

また楠見（2014）は、なつかしさを感じる風景についての自由記述の中から、テキストマイニングを使ってどのような単語が出てくるか調査を実施した。クラスター分析における結果から、「懐かしさを感じる音楽」という項目で大学生は「高校」という言葉が現れる回数が「小学校」「中学校」に比べて 4 回と少なかったことから、なつかしさには大学生にとっては 4 年以上の時間経過が必要であると指摘している。また長峯（2016）は日本人においてノスタルジアが経験されるかどうかを検討している。

このようにノスタルジアという概念そのものは、17 世紀からあったものの時代の流れや学問の発展に伴って意味の変遷もあった。しかし、こころの 1 つの側面を表すものとして存在し続けていることは間違いないであろう。そして、2000 年代になって、心を表わす言葉、情感の 1 つとして研究が盛んに進められている。

「青年期」について

Erikson, E. H. による人格発達理論における青年期（adolescence）の社会心理的危機を示す用語であるアイデンティティは有名である。これを日本

語に訳すと自我同一性であり、心理学辞典によると「自分は何者か」、「自分のめざす道は何か」、「自分の人生の目的は何か」、「自分の存在意義は何か」など、自己を社会のなかに位置づける問いかけに対して、肯定的かつ確信的に回答できることがアイデンティティの確立するための重要な要素であると定義されている。そしてこの逆がアイデンティティの拡散である。これは自己が混乱し、社会的位置づけを見失った状態を意味するとしている。西平（2011）は青年期において、Erikson, E. H. が「アイデンティティ vs. アイデンティティ拡散」という原理間の葛藤を提案した点に焦点を当てたこと、また人は青年期に至って初めて、自らの帰属すべき共同体を選び、その一員として生きてく「社会」を必要とすると論じている。人は 1 人では生きていくことができないため、何らかの共同体に自らを位置づけ、共同体から位置づけてもらうことによって初めて「自分」を見出すことになり、それが見出せないと、自己完結的な自己は成立しないとまとめている。

本研究に参加してくれた大学 3 年生という学年は青年期に当てはまる。日本社会において大学 3 年生から 4 年生になる頃とは就職活動の時期とされることが多い。一般的には、大学卒業後の進路について考える時期である。それは、自らについて振り返ったり考えたりする体験やこれまでの自らが所属していた共同体や、生活を共にしていた家族について、その関係性について考えるきっかけの 1 つとなる時期ともなる。

Ⅱ．方法

調査協力者

都内の A 大学に通い、ある授業を受けている 3 年生に対して、授業担当教員の協力を得て授業内で研究協力の告知を実施した。そこで協力を申し出てくれた 6 名に対してインタビューを実施した。

データの収集

データの収集期間は 2021 年 1 月〜2 月であり、COVID−19 の影響により、緊急事態宣言が発令された中での実施であった。そのため、一部の協力者には希望に沿って Web ミーティングシステムの「Zoom」を使用して実施した。なお、対面形式での実施の場合は、感染症対策を十分に留意したうえで、インタビューを実施した。

インタビューは半構造化面接を実施した。インタビューは①実家暮らしか一人暮らしか②故郷と聞いて思い浮かぶことはどのようなことか③故郷を思い浮かべるときはどのようなときでどのようなエピソードがあるか④故郷との関係はどのようなものか、また、これまでの関係やこれからの関係はどのようなものでありたいか、をガイドとして質問した。

インタビュー実施時間は 45 分から 50 分で、許可を得て IC レコーダーに録音した。

倫理的配慮

調査協力者に、インタビューを実施する前に本研究のインタビューについてあらかじめ説明を実施し、同意を伺うことでインフォームドコンセントを得た。特に本研究への参加は自由意志によるものであり、研究への参加不参加で不利益が生じることはないこと、インタビューにおいて心理的負担を感じた際には途中での辞退の自由についての説明し、参加への同意を得ている。

なお、これらの倫理的配慮の手順について、指導教員及び、質的研究法担当教員に事前に相談して決定されている。

データの分析

本研究における分析方法は修正版グランデッド・セオリー（M-GTA）

を採用した。M-GTA は Grounded Theory Approach（Glaser & Strauss, 1996. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳）をベースとして分析における課題を克服する形で考案された分析方法である。木下（1999, 2003, 2007）による M-GTA ではデータを切片化しないため、「研究する人間」、著者の視点を研究の中心として組み込んでいる。本研究の対象は、「故郷」という、形あるものとして同定することは難しい概念である。この概念を調査協力者の語りから立ち上げていくことを試みるにあたり、分析方法として M-GTA が適切であると考え、採用した。はじめに、インタビューで得られたデータの逐語録を作成した。この逐語録を読み込んだ後、第二段階として分析ワークシートを作成した。調査協力者 1 人 1 人の語りに対して、概念を最小単位としてカテゴリーを生成した。1 人ずつ概念を生成していき、全員のデータについてカテゴリーを生成した。これらのカテゴリー同士の関係性を検討し、概念図を作成し検討した。本文中ではカテゴリーを【　】、概念を〈　〉で示す。

Ⅲ．結果と考察

はじめに調査協力者の概要について説明する。次に、分析のプロセスの全体像及び、カテゴリー、概念名について説明した後に、考察を述べる。

1. 調査協力者の概要

調査協力者の概要を表 1 に示す。調査に協力してくれたのは 6 名であり、全員が大学 3 年生（2021 年 3 月現在）で女性であった。6 名のうち 5 名は原家族と同居していた。1 名は原家族から離れて、親族と同居していた。

故郷と認識している場所は、現在住んでいるところとして現住が 2 名、他地方が 2 名、不確定が 2 名であった。それぞれ 6 名のこれまでの居住歴は示した通りである。

表 1　調査協力者の概要

ID	学年	性別	同居人数（本人除く）	故郷と認識している場所	住んでいる場所の変遷
A	大学 3 年	F	3	現住	首都圏。転居なし
B	大学 3 年	F	2	他地方	首都圏から首都圏へ転居あり
C	大学 3 年	F	4	現住	首都圏・転居なし
D	大学 3 年	F	5	他地方	首都圏・転居なし
E	大学 3 年	F	3	不確定	首都圏内で転居あり
F	大学 3 年	F	5	不確定	首都圏内で転居あり

2. 分析の全体像

分析の結果、4 つのカテゴリーと 12 個の概念が生成された。結果図を図 1 に、そのストーリーラインをさらに示す。またそれぞれのカテゴリー名、概念、定義、代表的な具体例を表 2 に示す。

3. ストーリーライン

大学生に「故郷」にまつわるインタビューを実施し、今回の研究における修正版グラウンデット・セオリーは以下のストーリーラインで整理できる。

「故郷」を構成しているカテゴリーは【感じている「故郷」】・【認識している「故郷」】・【喪失した「故郷」】の 3 つであり、それぞれでの体験を位置づけた。また、【新型コロナウイルスの流行】というカテゴリーを、2020 年から現在までの私たちも体験している現在進行形の大きな事象として捉えている。

【感じている「故郷」】は 2 つの概念で構成されている。〈五感を通して〉の体験、〈心とイメージを通して〉の体験をすることで、具体性と抽象性の 2 つが補い合いながらより関係性を強くして存在する。

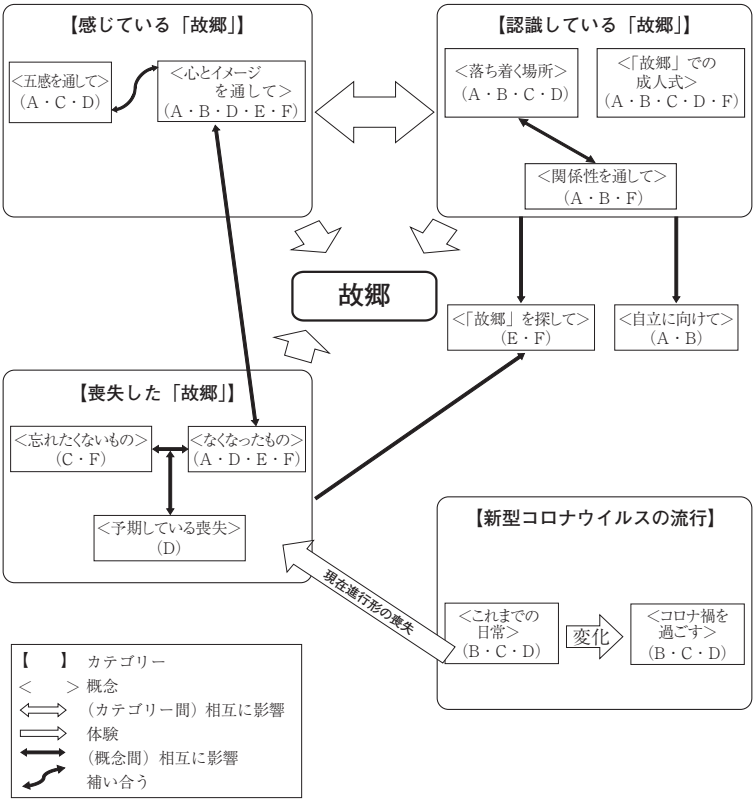

図１　大学生の故郷観に関するプロセス

【認識している「故郷」】では〈落ち着く場所〉の体験、〈関係性を通して〉・〈「故郷」での成人式〉の体験をしている。〈落ち着く場所〉と〈関係性を通して〉ではお互いに影響を与え合いながら体験をより強いものとしている。

【喪失した「故郷」】は〈忘れたくないもの〉、〈なくなったもの〉、〈予期している喪失〉の 3 つの概念である。すでに〈無くなったもの〉を体験しながら心の中でまた、今あるものを〈忘れたくないもの〉として体験する

表 2 「大学生の故郷観に関するプロセス」のカテゴリー・概念一覧

カテゴリー	概念	定義	具体例
感じている「故郷」	五感を通して	五感から感じる感覚を通して故郷を意識する体験	・全体的に静かというか。聴覚的にみても、視覚的に見ても静かなので、多分そう思わせるのだと思います。（ID: C）
	心とイメージを通して	心に浮かんだイメージを通して故郷を捉えてみること	・自然とかのイメージがあります。イメージとしては日本昔話の挿絵みたいな。風景みたいな山とか川とか（ID: B）
認識している「故郷」	落ち着く場所	外の世界と対比して息の抜ける内側の空間・場所	・本当にだれも干渉してこないような空間があって、そういうところで1人で転がってのんびりしてたとか、ゆっくり本を読んでみたり楽しんでます。（中略）家の外で人からちょっと厳しいこと言われた時とか帰りたいなあって。（笑）そういうことはあります。（ID: D）
	関係性を通して	家族や友人との関係を通しながら体験されること	・母親が意外と過干渉というか。で、それれに私もお互いに依存しあっているのあるから。（ID: A）
	「故郷」での成人式	それぞれの場所でのそれぞれの成人式体験	・今の数少ない友人は同じ大学で、たまに遊びに行ってたから、そんなに昔の人に会えるっていうのはなかったかなあ。（ID: F） ・一応帰ったんですけど、同窓会だけ行って、次の日大学でテストがあったので、行けてないんです。（ID: B）
喪失した「故郷」	忘れたくないもの	自分にとってとても大切なもの・こと　それを大切に思う気持ち	・雰囲気がすごい好きなので……変わらないで欲しいというか、なんていうんだろう。変わらないで……（笑）そういう感じなのかな（ID: C）

カテゴリー	概念	定義	具体例
喪失した「故郷」	なくなったもの	すでに存在しなくなってしまったもの　喪失はいろいろな形で起きる	・祖父母の家が、やっぱりあったりとか自分が行ける、（中略）行ける場所がもうないんですけど、過去あったので、そういう意味では思い入れが強い。（ID: E） ・（河川の名訂）の決壊でおうち流れちゃったんですよ。そのおうちが無くなっちゃって、そこで過ごした思い出とかも無くなっちゃった気がして。（ID: A）
	予期している喪失	時間の経過とともに起きる変化がもたらす喪失を予想する	・（祖母しか住んでいないので）家っていうものはなくなると思うんです。（ID: D）
新型コロナウイルスの流行	これまでの日常	改めて意識した日常	・休みの長期休みの度に少なくても2週間、長くても一カ月のような感じで、（中略）1年の回数で数えると1年に3回くらいは帰ってます。（ID: D）
	コロナ禍を過ごす	新型コロナウイルスの流行によって変化した日常を過ごすこと	・去年の夏……帰省する予定だったんですけど、帰れなくなっちゃって、、、年末のあたりも帰れなくなってたんですけど、ちょっとさすがに帰りたすぎるって大騒ぎして（ID: B）
	故郷を探して		・帰る場所は家はあるんですけど、故郷じゃない感じがやっぱりして、（中略）自分には故郷はないんだなっていう感覚を持っていたことがあったので。（ID: D）
	自立に向けて	「故郷」との距離感を探りながら、思うこと	・もうちょっと、なんか、独立しないといけない感があって、つかず離れずくらいの、時折帰ってくるくらいの距離感でいられたらいいなって。（ID: A）

こともあり、これらの体験からこれからの未来に起きると予想する喪失を〈予期している喪失〉として、予想している。

【認識している「故郷」】と【感じている「故郷」】を体験することは【認識している「故郷」】で感じたことを想起しながら【感じている「故郷」】を確認することで、それぞれが影響を与え合っている。

〈なくなったもの〉を感じ、思い出すときにはすでに実在しないため、〈心とイメージを通して〉想起している。

2020 年初頭から全世界で流行している【新型コロナウイルスの流行】は〈これまでの日常〉を一変させ、“新しい生活様式”という言葉で表現されるような〈コロナ禍を過ごす〉という体験をもたらした。〈これまでの日常〉は失われてしまい、インタビューを実施した期間も、論文を執筆している段階においても失われることが現在進行形で続いている。そのため、【喪失した「故郷」】とも近い体験をしている。

自分にとっての「故郷」はどこだろうという思いを【喪失した「故郷」】の体験から考え、【認識している「故郷」】の体験から考えることで、〈故郷を探して〉いる体験も存在する。また、【認識している「故郷」】からの〈自立に向けて〉の心の動きが起きている。

以上のことから、【感じている「故郷」】・【認識している「故郷」】・【喪失した「故郷」】は「故郷」を構成するカテゴリーであり、相互に関係性や影響を与えている。さらに世界の大きな動きである【新型コロナウイルスの流行】の影響を見ることができる。また、カテゴリー化には至っていないが 2 つの概念を見出すことができた。

4.【感じている故郷】にまつわる考察

〈五感を通して〉感じる故郷は、五感であるため、「視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚」を通して感じるものである。今回のインタビューでは表 2 に

あるように視覚にまつわる語りだけでなく、聴覚・嗅覚にまつわる語りもあった。〈心とイメージを通して〉は表2にあるように一般的なイメージに近い語りであると考えることもできるが、図1の「補い合う」が示すように、五感で感じたものから心で想起して感じたりすることもあると捉えている。それが今も現実に存在するものであれば、

【事例】歩いていて（特徴的な光景が）目に飛び込んできたときに、そこで、あ、帰ってきたなという気持ちになりますね。

という語りとして現れるのだろう。反対に、現実にすでになくなってしまったものであれば、

【事例】風景とか街並みとか（中略）もし変わっていれば、思い出とかイメージとか壊したくないので行かないと思うんですけど。

という表現で心の中で思い出し、心を通して感じているのだろう。これは【喪失した「故郷」】との関係はとても強いものであると表わす語りであると考えている。すでになくなってしまったものを、五感を通して実体験を伴いながら体験することはできない。そのため、昔の写真や他社との会話を通して、光景や情景を心の中で再体験のような形で思い出しているのではないだろうか。そしてこのような時にノスタルジア、つまりなつかしさを感じているのではないだろうか。そして大切な体験であると、そのまま「良い思い出・イメージ」という位置づけで自己の中に保っておきたいという心の動きになるのではないだろうか。良いものを良いもののままにしておく心の動きは、喪失をどのように認識するかだけでなく、喪失を体験し、そこから心がどのように再び動くかを踏まえることが大切であろう。

単純に「故郷を感じたり思い出すこと」は、感じたり思い出すことだけで起きうることではないのだろう。もともと、心象風景や思い出として心の中にあることが前提となり、なにかの出来事をきっかけにして思い出されると予想される。今回のインタビュー自体が思い出すきっかけの 1 つになっていたことも考えられるが、思い出せることのそのものの大切さや思い出す体験が心にどのような動きをもたらすのかを考えることも大切になるだろう。

【事例】帰ったら受け入れてくれるというか、私の居場所っていうか、あったかい場所って思っていた。

この語りは、Davis, F.（1979）がノスタルジアからの連想される言葉として挙げた「暖かさ」にも通じるものがあると考えている。このノスタルジックなものとしての「暖かさ」を言葉のみで表現し、定義することは難しいと思われるが、【認識している「故郷」】にある〈落ちつく場所〉との関係・影響はあると考えている。それは「受け入れてくれる」や「居場所」という言葉が並列に語られていることが大きいのではないだろうか。私たちの日常的な体験に目を向けると、落ち着くと感じるときにはほっとしたり心が安らいだりする気持ちになる。相互性を考えれば、なつかしさを感じる、感じている人にとって大切ななつかしさであれば、落ちつく場所としても認識することにつながるのではないだろうか。

5.【認識している「故郷」】と【喪失した「故郷」】にまつわる考察

〈落ちつく場所〉と【感じている「故郷」】においての考察は、上記に述べた通りである。

〈関係性を通して〉はその場所にいる人、家族との関係はもちろんのこと、

場所との繋がりもあるだろう。しかし、今回の「場所」は「家」・「家族」という意味合いが強いと考えている。それは今現在、家族や親族のいる家に住んでいることが影響してきているだろう。それでも関係性を通しながら落ちつく場所を持つことは、故郷が持つ力を考えると個々の存在を確かなものにしていく面からも必要なことなのだと考える。そしてより詳細な考察は後に触れたい。

今回は、大学 3 年生へのインタビューということもあり、成人式にまつわる質問をしている。成人式というと就職や進学に伴って地元を離れている人が地元に戻り友人と集まる、などの映像がニュースで流れたりするが、今回の調査協力者の中には「ニュースで取り上げられている成人式」に定型的に参加している人はいなかった。参加はしていても、

【事例】式場に一応、行きました。（中略）仲良かった子が偶然同じ自治体で、ずっと 2 人でいました。

【事例】中高での成人式に行きました。

という語りで見られた。それでもなんらかの形で、成人式を体験していることは全員において共通しており、イニシエーションの意味合いからも検討する余地があると考えている。

「家」は、今そこにいる人によって構成される側面が重要である。そして人との関係性は変化する。その変化は、月日が過ぎることをはじめとした、さまざまな影響によって「変わってしまう」ものもあれば「失われてしまうもの」もあるだろう。

【喪失した「故郷」】における〈なくなったもの〉は対象喪失（object loss）とも捉えてよいであろう。対象喪失という精神分析の概念は、小此

木（1979）の著作によって日本に紹介された。そこでは近親者の死と関連付けられて紹介されることは多い。しかしその概念は、近親者の死をはじめとする、愛情・依存の対象の死や、子どもの成長に伴う青春期（青年期）の親離れに対する親の子どもを失う体験と、子ども側からは親離れによって父母を失う体験も含んでいる。また、住み慣れた環境や故郷からの別れも同様である。一言で「喪失」といってもその対象は、実在の人物だけではなく、現象的所有物やさらに心理的体験にまで多岐に渡る。また、その人の年代よっても体験される喪失や喪失に対する理解・心の動きも変わるであろう。対象を失った場合、大きく分けて 2 つの心の動きがあるとされる。1 つは心的なストレスとなっておこる急性の情緒危機（emotional crisis）であり、PTSD（Post Traumatic Stress Disorder）に通じている。もう 1 つは対象を失ったことに対する持続的な悲哀（mourning）の心理過程であり、これは心理的な喪の作業（Mourning Work）を必要とするものである。この対象喪失という概念を捉えると、人間が成長するにあたり、広い意味での対象喪失体験を体験せざるをえず、不可避であることが明らかになっている。少なくとも、「子ども時代」「子どもとしての自己」「子どもだった自分が信頼していた他者」は成長に従って喪失する。そのため、子ども時代を過ごした環境の喪失が体験されるのである。

【事例】祖父母の家が、やっぱりあったりとか自分が行ける、（中略）行ける場所がもうないんですけど、過去あったので、そういう意味では思い入れが強い。

この語りは、時間の経過がもたらす喪失と捉えることができ、環境の変化によるものではないだろうか。これは小此木（1979）による「自己を一体化させていた環境の喪失」と捉えることもできるだろう。人間は、一定

の環境に適応して暮らしていく過程で、その環境の構造や自然の風物に密着し依存することで、安定感を得ることになる。それはその場の光景や匂い、雰囲気との一体感であるとされている。図 1 は【感じている「故郷」】の〈五感を通して〉にたどっていくことも示しており、故郷を考えていく上で喪失にまつわる体験は避けて通ることはできないと考える。ここから言えることは子どもの成長は、日常の 1 つであるから、日常の中にも喪失を体験することはあるといえるだろう。ここまでの考察は「平和時」であることが大前提である。小此木は「平和時」という表現しているが、小此木の育った時代背景等を考えると、本論文においては「日常」「非日常」という言葉が、私たちが今生きているこの体験世界を表現する意味からも適切であろう。

ここに日常の風景が失われる、非日常の体験を挙げることができる。

【事例】（河川の名前）の決壊でおうち流れちゃったんですよ。そのおうちが無くなっちゃって、そこで過ごした思い出とかも無くなっちゃった気がして。

この語りが示すものは、自然災害による喪失である。日本は自然災害が多いことは承知の通りである。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災よる被害は甚大なものであり、その復興はいまだ途上である。この間、10 年の月日が経過したが、地震だけではなく台風をはじめとした自然災害の報道は毎年のようにあるのが現実である。

精神分析で主に想定されている喪失の対象の 1 つは「人」であり、その多くは祖父母やいずれは父母なのだろう。そしてもう 1 つの対象は「モノ」であろう。そこに住む人がいなくなってしまえば、いずれは住む場所である家などもなくなってしまう。人がいなくなれば、その人にまつわる

モノも失われ、時には家も壊されることもある。そして、モノがなくなってしまえば、そこにまつわるエピソードも形あるものと一緒に存在する形では同時に失われてしまう。そうして残るものはこれらにまつわる記憶である。これらの人とモノの喪失は、事象としてはそれぞれ起きる出来事であるが、互いに関わりを持ちながら同居している側面もあるだろう。ここで語られた喪失は自然災害によるものであり、予期できないものであった。しかし、人生の経過や成長に伴う喪失は、「最愛の対象である自己を失うこと」（小此木 1979）として、予期され死は最終的には誰もが迎えるものである。そこで自身にとって、かけがえのない環境・場所である故郷についても人生の流れの中で、いずれそれらが喪失されることを予期している。この〈予期している喪失〉を知的に理解することはできても、十分に意識化し、自己のものとして受容することは極めて困難だろう。

年に 1 回しか帰らなくなってしまった田舎であっても「あと何回帰れるかな」と思いながら故郷に行き来することは、特別な意識をしていなかったとしても、喪失に対するある種の予期がそこには含まれているのかもしれない。その体験そのものを大切に思うことで〈忘れたくないもの〉として認識していくことに繋がっていくのではないだろうか。それは自分にとって大切なものであるという認識だけではなく、「大切だ」と思う気持ちそのものを感じることが大切になるのではないだろうか。

時が経つことで失われることは、物理的に離れていく・遠ざかる距離を生じさせる可能性がある。しかし、それに伴って比例的に心理的な距離が遠ざかることはなく、むしろ心の中で体験し、思いを馳せることをするきっかけとなり、故郷に対しての心理的距離は近くに感じるのではないだろうか。

6.【新型コロナウイルスの流行】にまつわる考察

概念図にも示したように今回の分析では、【新型コロナウイルスの流行】をカテゴリー化した。これは2020年から続く非日常的事象として取り上げるべきであると考えたためである。そして【新型コロナウイルスの流行】はある種の災害の側面を持つと考えている。〈これまでの日常〉が一変してしまい、2020年初頭はどのような生活することが正しいのかもわからないまま日々を送っていたことは、多くの人に当てはまる体験なのではないだろうか。街から人が消え、マスクをして生活をし、これまで会えていた家族・友人に会えなくなってしまった。会えるようになったとしてもそれは画面上を通した、オンラインという形をとるようになった。これまで私たちの日常であったものを喪失した体験は、私たちが存在するうえで拠り所としていたものを喪失したことを意味しており、その喪失は現在進行形で続いているともいえる。【喪失した「故郷」】をヒントに考えるのであれば、私たちが大切だと思っている人と人を結ぶ〈忘れたくないもの〉はいったいどのような体験なのかを考える必要があるのかもしれない。〈忘れたくないもの〉を感じていることは、つまり「忘れられないもの」があることと同義なのだろうか。ある人にとって「忘れたくない／忘れられない」場所があることは心を通して感じる心の動きそのものである。ポジティブな感情とネガティブな感情のどちらの感情であったとしても、その「忘れたくない／忘れられない」場所が存在することそのものが、その人自身が自らをアイデンティファイする面からも意味を持っているのかもしれない。そこになつかしさを感じ、ノスタルジアを感じることは、ノスタルジアがなんらかの制御機能、孤独感を低め社会的つながり感を高める機能、社会的態度を変化させる機能についての言及や、健常者を対象とした場合には健康な心理状態を保つというポジティブな機能を持っていることが報告されていることを考えても、個人が存在するうえで必要不可欠な

こととといえるのではないだろうか。川口（2014）もノスタルジーの機能とメカニズムの解明が、人はなぜ過去も記憶をありありと思い出すのか、人はなぜ他者と関わりを持とうとするのかなど、記憶・感情の中でも最も人間らしい部分の特徴を捉える重要な道しるべとなるとしている。さらに、深く捉えていくのであれば「なつかしさを感じていること自体」に焦点を当て、「なつかしさを感じていることそのもの」がどのような体験であるかを調査していく必要があると考えている。今回の研究の調査協力者であれば、現実的には実家を離れる不安や、1 人暮らしへの不安を考えながら葛藤することになるのだろう。これは「死」に対する不安、不安として意識する水準に至っていない可能性が考えられ、言語化はされないが、漠然としたものとして存在しているのではないだろうか。

7.〈故郷を探して〉と〈自立に向けて〉にまつわる考察

独立している概念の〈故郷を探して〉は、都市部に住んでいる人が持つ課題の 1 つなのかもしれない。

【事例】故郷と言われるとすごい困っちゃうというか、今住んでいる場所が故郷という感じではないから、自分にはどちらかというと故郷という場所がないから父親の故郷（地名）がうらやましくっていいなあって。

この語りにもあるように、都市部に住んでいる期間が長いことが「故郷は〇〇だ」と言い切れないような思いへの影響をもたらしている可能性を示唆すると考えている。「うらやましさ」は自分にはないことを認識していることで自分にも欲しい、あったらよいなという気持ちから生じる感情でもあり、自分にないと感じるのであれば探しもしくは代理のように、この

事例の場合は父親の故郷を、考えることがあることを示している。これは、個人の経験を通して【認識している「故郷」】や【喪失した「故郷」】を体験すると、自分のものとして確立していない気持ちを感じ、故郷を探すような心の動きになるのではないだろうか。本研究の協力者が体験している・体験するライフステージから考えても、変化の時期を迎えていることは先に述べた通りである。変化は、現実的な距離を生じさせる可能性を持っている。楠見（2014）がなつかしさを感じるまでの期間について述べているように「今、体験したこと」からすぐに故郷へのなつかしさにつながるわけでない。しかし、現実にそのような場所との距離が生じることは、心理的には感情や思いを馳せる場所としての存在感を増すことが予想される。これは、【認識している「故郷」】と【喪失した「故郷」】にまつわる考察で述べたような現実的な動きと心の動きが起きていると考えられるのではないだろうか。

〈自立に向けて〉は先にも示した通り、大学 3 年生であることは大きく関係してきているだろう。次のライフステージに向けて、現実的には就活という形で動き、それに伴う心の動きもあるのだろう。Erikson, E. H. による、発達課題における同一性（identity）と同一性の混乱（identity diffusion）という観点があるように、個人のライフステージを見ていく上で外せない観念だろう。それは表 2 にある語りにも示されているだろう。

そして、もう 1 つの観点として、

【事例】もうちょっと、なんか、独立しないといけない感があって、つかず離れずくらいの、時折帰ってくるくらいの距離感でいられたらいいなって。

【事例】ずっと実家にいることになる（中略）このままじゃ、1 人の人

間として問題だろうなっていう、親に依存しすぎているんだろうなって。

これらの語りからも分かるように、故郷は場所であるが、そこにいる人との関係性、つまり家族との関係性についてである。〈関係性を通して〉の考察にまつわって、家族や家との関係について言及した。故郷を語る上で、家族や親の存在を抜きにして語ることはできないであろう。核家族という言葉が使われるようになってかなりの月日が経つようになった。1 つの家の中に 2 世代（親子）が住むことが多いのは今も変わらないだろう。都市と地方だと、地域とのつながりは近所付き合いという言葉で表現したとしても少なくなることは想像できる。子どもを育てることを地域でも抱えるか家庭で抱えるかというところからも見ることができる。いずれにしても家族との結びつきが強いことは、大切なことである。しかし、〈自立に向けて〉というカテゴリーが存在するように、家族への動きと外への動きが同時に存在する時期であることも示している。そうすると別方向への動きなので葛藤が生じてくるだろう。自分にとって故郷であること、つまり自分が安心して存在することのできる場所であることを感じることは、自分の親の存在があることが自分の安心感に繋がることの同義となる。もちろん、親子関係が安定し、基本的信頼感のもとに関係性が構築されていることは重要である。このことは個人が存在するうえで安定をもたらし、危機（困難なこと）に遭遇した際には大きな助けとなるだろう。一方で、その安定をもたらすものが揺らいだり、脅かされるときには、自己をも脅かされ不安定になるだろう。そのようなときに、これらの危機をどう乗り越えていくかが大切になる。このことが本研究では、青年期の課題が〈自立にむけて〉という概念の形で表れたと考えられるだろう。親をどのような形で心理的に乗り越えていくかという課題が表れているとも考えられ、この

課題を乗り越えることは人生を歩んでいく上で不可欠であるし、乗り越える際には現実的な動きだけでなく、様々な心の動きがそこには伴うだろう。

8. 故郷を持つこと・そこになつかしさを感じること

人は故郷があると感じ、そこになつかしさを感じ、思いを馳せることはどのような意味があるのだろう。故郷にまつわる質問をすると、今回の調査ではノスタルジア（なつかしさ）、ノスタルジアを感じることでの喪失といったキーワードを基準として見出すことができた。

故郷がどのように体験されているかという視点でも考えていくことができるであろう。それはノスタルジアであったり、喪失であったり、今を生きているから新型コロナウイルスの流行であったりとカテゴリーとして考えていくこと自体には一定の成果を得ることができたと考えてもよいだろう。これらはすべて、日常が持つ 1 つの側面であるという考え方もできるのではないか。日々の日常はあくまでの日常なので、それを常日頃から意識して生活を送ることは少ないだろう。それでも「故郷」にまつわる質問をすると、柔軟剤の匂いを〈五感を通して〉感じてみたりする。また、何気ない駅の風景を語られることがある。これらはステレオタイプとしての故郷とは大きく異なっているかもしれない。ステレオタイプとしての故郷は、

【事例】山があったりとか、木がいっぱい生えていたりとか（中略）、文字的にすごい田舎っぽいなという印象を持って。

という語りが示すものも大きいのだろう。モリソン（2015）が述べているように、近代以降の変遷の影響をそのまま受けている形にもなるだろう。しかし事実として、定義のニュアンスではこのように語られる。

それならば、東京のような大都市やその周辺に生まれ育った人は、「故郷がない」ことになるのだろうか。

【事例】学校のあった○○（土地の名前）の方が、懐かしい思い出があるかもしれないです。（中略）あ！そうだ ××（土地の名前）！（親の仕事場のあった ×× に）よく帰ってて。そこで習い事とかしていたから、家ではないけど、すごく所縁のある土地とか場所の思い出。

この語りは、ステレオタイプの故郷を考えるのであれば、故郷に当てはまらないのかもしれない。しかし、学校が終わって親のいる地域に行き、習い事をその地域で習い、習い事が終わったら親と合流したりして家に帰っていたのであろう。そこには語った人にとっての日常があり、そこには家族もいて、家族と過ごした日常もある。幼いころに過ごし、習い事にまつわる記憶や土地の記憶はなつかしさとして認識されている。そして「所縁のある土地」という表現は、故郷の辞書的な意味から見ても故郷とすることができると考えるし、それ以上に語り手にとっては、辞書の定義などは関係なく、感覚として自分について語る上で欠かすことのできない場所として認識していると考えられるのではないか。つまり自分にとって大切な場所があることそのものが「故郷がある」と考えることができるのではないだろうか。それは田園風景であっても、ビル群が見える土地でも、住宅街が立ち並ぶ土地であったとしても、なにかの制限があることで限定されるものではないのかもしれない。

今回、協力してくれた大学三年生という年代を考えれば、年齢からみても、自分がそこで日常を過ごしていたと感じる、さらに安心感や、暖かさや心地よい関係性を感じることは、故郷を語り、考えていく上で重要な要因となっているのではないだろうか。

日常は日常であるからこそ、日常として認識することが難しく、変化や失われることを通して認識することが多くなる。そして、日常は数字を通して量的に把握することは難しく、「日常」の質を形容詞で表すことも難しいと思う。もちろん、日常を過ごすにあたり気持ちの変化や心の動きがあるので、情緒は体験されている。これは藤山（2016）が、愛は主観的な体験であり「情緒」の主観的な体験であるとしていることに似ている部分もあるだろう。この相対的なものとして「死」は体験することはできず、体験した者もおらず、死は体験ではないから「情緒」の質を表わす形容詞はないとしている。「“死”は“死”」であるとも述べている。情緒を主観的に体験できること、故郷にまつわることに関して情緒的で主観的な体験をしていることは、経験則からも言及することができるであろう。故郷に限らず、私たちは今を生きているから、そこでの情緒的な動きがあることそのものが、私たちが生きている生きてきたと感じる 1 つの「なにか」になっているのではないだろうか。そのうちの 1 つが日常であり、故郷なのかもしれない。

繰り返しになるが日常を普段の生活の中で意識することは難しいだろう。そのために式典はイニシエーションとして機能するのかもしれない。成人式は今回のインタビューの協力者にとってはタイムリーな式典であったと考えられるだろう。人生の中で、さまざまな式典を体験する。日本の文化にはそれが根付いており、それが今も存在している。七五三もその 1 つだろうし、成人式、結婚式、葬式、年齢ごとのお祝いも存在する。それは 1 人で体験するものではなく、そこには家族や、地域も巻き込んでのイベントとなる。ある集団として体験し、そのことを共有することはその繋がりを再確認することにもなり、自己が存在することの再確認にも繋がりうるのではないだろうか。

9. まとめ

大学生に「故郷」に関するインタビュー調査を実施し、M-GTA による分析を実施し、そこから得られた結果に基づき、故郷について多くの側面から考察を行った。

そこで一貫していたのはどのカテゴリー、概念であったとしても、その語りにはその語り手自身が必ずいて、様々な心の動きや体験がなされていたことである。その心の動きや体験は必ずしもポジティブであるとは限らない。しかし、この心の動きや体験は「故郷」の存在が心的にも存在することを裏付けるものものとなった。また、故郷にまつわる体験は、ノスタルジアや喪失体験と密接に関わることが明らかとなった。協力者である青年期の人々にとって故郷での体験が心にもたらす影響を確認できたと言えるだろう。そこでは、物理的な距離は必ずしも心理的な距離と比例しないことが明らかにった。青年期の人たちは、日常ばかりだけではなく、非日常の観点から故郷を捉え、そこには喪失や死にまつわる体験が深く関わっていた。このような意味で故郷を認識し、故郷にまつわる体験をすることは、この世代の人たちにとって、これからの人生を歩んでいく上で 1 つの基準点となる可能性を示していると考えられた。

Ⅴ．本研究の意義と課題

今回の研究において調査協力者の多くが、現在学生であることも踏まえて家族と住んでいる事例が多く、5 名であった。1 名は親元を離れて親族と暮らしていた。そのため、故郷をどのように体験しているかを 1 つの基準として【感じている「故郷」】・【認識している「故郷」】というカテゴリーで場所を基準にするような形で作成している。インタビューを通して、そこにいる人との関係性、特に本研究においては家族との関係は大きな 1 つの注目すべき点であった。関係性に関して考察で触れたが、家族との関

係は大きなテーマの 1 つとしてあるため、さらに調査する余地があるだろう。

本研究の調査協力者は、青年期に該当する年齢層である大学 3 年生が対象であった。故郷にまつわる研究で、20 代後半や 30 代でも故郷感が変化する可能性は大いにあるため、異なる年齢層を対象としての研究は必要になるであろう。

M-GTA における分析において、カテゴリーの作成の作業等は理論飽和化まで実施することが必須である。そのため、本研究には、更なる分析の余地があると考えられる。

引用文献

Davis, F.（1979）. Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia. New York: Free Press. 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子（訳）（1990）．ノスタルジアの社会学　世界思想社。

Erikson, E. H.（1946）. Ego Development and Historical Change—Clinical Notes. *The Psychoanalytic Study of the Child, 2: 3 59–396*. New York: International Universities Press エリク・H・エリクソン著　西平直・中島由恵（2011）誠信書房。

グレイザー，B. G.・ストラウス、A. L.（1996）データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか（後藤隆・大出春江・水野節夫、訳）新曜社。

Hofer, J.（1934）. Medical dissertation on nostalgia（C. K. Anspach, Trans.）. *Bulletin of the History of Medicine, 2, 376–391*.（original work published in 1688）.

小此木啓吾（1979）．対象喪失　悲しむということ　中公新書。

川口潤（2011）．ノスタルジアとは何か—記憶の心理学的研究から 『JunCture』2 号　54–65。

川口潤（2014）. 人はなぜなつかしさを感じるのか—日本心理学会（監修）　楠見孝（編）　なつかしさの心理学—思い出と感情—　誠信書房。

木下康仁（1996）．グランデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生。弘文堂。

木下康仁（2003）．グランデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い。弘文堂。

木下康仁（2007）．ライブ講義 M―GTA 実践的質的研究法–修正版グランデッド・セオリー・アプローチのすべて。弘文堂。
広辞苑　第 5 版　岩波書店。
楠見孝（2014）．なつかしさの心理学―記憶と感情、その意義―日本心理学会（監修）楠見孝（編）なつかしさの心理学―思い出と感情―　誠信書房。
松木邦裕・藤山直樹（2016）．こころの臨床セミナー BOOK　愛と死　生きていることの精神分析 創元社。
村尾誠一（2006）．和歌における「故郷」のディアレクティク　総合文化研究　9 号　20–32。
長峯聖人・外山美樹（2016）．日本人はノスタルジアを経験しうるか？―ノスタルジアの “bittersweet” な側面に着目して―　感情心理学研究　24　1 号　22–32。
Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C.（2008）. Nostalgia: Past, present, and future. *Current Directions in Psychological Science, 17, 304–307.*
心理学辞典（1999）. 有斐閣。
リンジー・モリソン（2015）．近世における「ふるさと」考　アジア文化研究　41 号　21–38。
Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C.（2006）. Nostalgia: Content, trigger, function. *Journal of Personality and Social Psychology, 91, 975–993.*
Wildschut, T., Sedikides, C., ＆ Routledge, C.（2008）. Nostalgia: From cowbells to the meaning of life. The *Psychologist, 21, 20–23.*

謝辞

本論文を執筆するにあたり、協力を引き受けて下さった 6 名の研究参加者の皆様に深く感謝申し上げます。また、貴重なご指導を頂きました、吉川眞理先生、綾城初穂先生、本論文を執筆するきっかけを下さった、児童養護施設関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

A Qualitative Study of University Students' Views of native place

AMANO, Shingo

The purpose of this study is to investigate University students' views of their native place. Interviews were conducted with participant both in face to face and on the web. We thought it was difficult to position native place as a tangible thing. The acquired date was analyzed using the modified grounded theory approach（M-GTA）method.

In Japan, "Furusato; native place" has been used since A・C. 710 in the " Manyoshu", a collection of Japanese poetry, with the meaning of "another land". It has also been confirmed in various poetry anthologies in another periods. The meaning of the word "Furusato; native place" as same as today is made after the Meiji Restoration.

The term of nostalgia was originally made by the psychiatrist Hofer, J; Hofer.（1688, 1934）, combining nostos（return）and alogos（pain）, and was used synonymously with homesickness. In the latter half of the 20th century, in the term of Freudian psycho Analysis it was regarded as a kind of regression. In recent years, however, Davis, F.（1979）has shown that it is not just symptoms of pathology. He stated that associations with the word nostalgia include "warmth, antique, and childhood. Kusumi, T.（2014）also mentioned that nostalgia do not always mean the same thing between Western and Japanese culture. In the 2000s, research on nostalgia progressed. Among them, Wildschut, T.（2006）investigated the property of nostalgia and found that it is related to attachment anxiety tendencies and social ties.

The conception of Identity by Erikson, E. H. is popular. It focuses on the conflict between the principles of "identity vs. identity diffusion" in adolescence. He argues that it is important to commit oneself in the community and to be recognized by the community because one cannot live alone.

In this study, six people cooperated in the survey; all six were female; five of the six lived with their original families, and one lived with a relative. Two of the

respondents identified their native place as their current place of residence, two as other regions, and two as undetermined.

As a result of the analysis, four categories and 12 concepts were generated: “felt ’native place,’” “perceived ’native place,’” “lost ’native place,’“ and ”new coronavirus epidemic.

It is expected that the native place can be perceived which offer calmness, whether it exists in reality or in the mind. It is also thought to have the potential to be one of the places of initiation.

In addition, loss is always experienced in the process of human growth. This experience of loss is something that happens in day to day. On the other hand, loss due to disasters might be experienced, then it would be extraordinary experience. Although psychoanalysis that Loss of familiar persons, but in this study, the loss of things is also discussed.

The epidemic of new coronaviruses has been going on since 2020 to the present, and it is a topic that cannot be avoided. I think that it can be seen as a kind of disaster, and therefore, then occurred the loss of relationship with “native place”.

“Looking for native place” and “Towards Independence” is important themes for the University students to think their life stages.

What does it mean to have a native place and to feel nostalgia for it? One way to look at it is from the perspective of how one experiences one’s native place. It can also be seen in terms of nostalgia and loss. It is found that adolescent their own identity through psychological experience of loss of “Furusato”.

The limit of this study, since the target group was third-years University student, there is a possibility that the results will differ greatly if the age group is changed.

（臨床心理学専攻　博士後期課程 3 年）